

冷え症は江戸の薬食いタブーけとばした江戸女

江戸の冬が、いまよりはるかに寒かったことは十分想像できる。しかも冷え症とあれば、いかにしつかり者の江戸のカミさんでもかなりこたえたらしい。そこで――

冷え症で 二十日ほど食う 冬牡丹^{ふゆぼたん}

と、川柳子も半ば冷やかしながら同情することになる。冬牡丹というのは、牛肉の隠語で、江戸時代、大つびらに四つ足の動物の肉を食べることは固くタブーだった。そこでイノシシを「ボタン」、牛を「冬牡丹」、鹿を「モミジ」などと言い変えてかくれ食いたのである。それにしても、牛肉を二十日間もぶつ続けて食べるとは、いまだきでもそんなご仁はそうざらにあるものではない。冷え症だからこそ、牛肉を食べれば温まるのが人一倍実感されたのかもしれないが、だからまた、禁制を破って二十日間も牛肉を食い続けるという度胸もついたのでろう。

蛇足ながら、当節の人間としての経済的実感からいえば、冷え症のオカミさんが二十日間もぶつ続けて牛肉が食べられるなんて、当時の牛肉の「ヤミ値」はよっぽど安かったものとも見える。

一方、江戸のオカミさんの多くは、時代が時代だけに「かたくな」だったらしい。

薬食い 女房きせるを ひつたくりは、いささか難解な句だが、注釈すれば、江戸時代、ご法度の獣肉を食べることを薬食いといった。

薬食い 隣の亭主 ハシ持参

のように、表向き薬食いなどごまかしながら、その実は、半ば公然と獣肉食いが行われていたらしいことをこの句は語っている。が

女房きせるを ひつたくり

は、そこはそれ女房の坎で、亭主がこつそり薬食いして来たことを感づいたというわけである。そこで「あんた、薬食ったわね」なんて野暮などがめ立てはせず「ちよつと、においが移るじゃない」と、亭主のキセルをひつたくったというわけである。

この微妙なしぐさから想像すると、このオカミさん、タブーを破って獣肉を食べることそれ自体には必ずしも反対はしないが、亭主が自分だけいい思いをして来たことをやつかんているようなのである。

しかし「何よ、自分だけいい思いをして」なんていわなかったところがイキな江戸女である。

